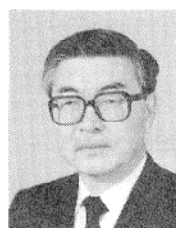




巻頭言

## 研究のストラテジー



金森順次郎\*

研究費の動向は、日本と欧米諸国でかなり差がある。欧米諸国においては、政府支出の研究費は削減の方向にあって、今後は curiosity-driven research を手広く援助することをやめて、目的計画がはっきりした研究 (strategic research) だけに絞るべきだという議論が盛んである。他方、日本では研究立国が唱えられ、研究費の公的負担は増加の方向にある。

日本の研究費の政府負担の割合は22%、これに対して米国では42%である。また、政府研究費の対GNP比は、日本は0.6%、米国は1.1%であるから、米国で削減の方向としても、日本では、増加する方向にあるのは当然といえる。しかし、strategic な研究という問題は、立ち入って考えておく必要がある。元来研究には目的があるから、curiosity-driven と strategic を対立する概念のようにとらえることはあまり当を得ていない。米国等での議論には、重点的配分ということで議会の理解を得やすくする狙いも含まれている。

\* Junjiro KANAMORI

1930年3月7日生

1953年(昭和28年)大阪大学理学部物理学科卒業

現在、大阪大学総長、理学博士、物性理論

TEL 06-879-7004 (勤務先)

FAX 06-879-7006 (勤務先)

基礎研究の場合、計画が整然と年次を追って進行することは稀であって、途中で軌道修正なり方向転換なりを重ねるのが普通である。この意味でストラテジーという言葉にアレルギーを示す研究者もあるのは当然であるが、意外な発見や発明の背景には、夢ともいえるべき大きな目的意識が潜んでいる場合が多い。例えば、昨年10月滋賀大学で開かれた日米シンポジウムでもトランジスターの発明にはストラテジーがあったことをベル研のパテル氏が指摘していた。夢のある研究こそストラテジーが必要である。また、そのストラテジーには、意外な研究結果に対処して思考を転換できる柔軟さも必須のことである。

昨今、わが国では、独創的な基礎研究が生まれることを待望し、大学研究者に奮起を促す声が多い。わが国の研究のスケールを小さくしている一因は、外国で生まれたストラテジーを借用してプロジェクトを計画することにある。しかも、その計画にとらわれて、新奇な知見に好奇心を働かせないこともままある。研究者がストラテジーを錬ることは独創的研究を生む第一歩であろう。また、今日わが国の研究費配分でもプロジェクト重視の傾向が強いが、外国追随型の無難な計画が幅をきかして、夢の多い研究を圧殺することがないよう、我々としても気をつけなければならない。